

また、長年にわたる単純な輪作形式に馴れているため、蔬菜栽培等による生活の変化は、経済的不安定さへの恐れとあい併って容易なものではないだろう。この地域が変化するには、まず、交通条件等の変化により外部との関連の密接になることが必須の条件であり、他律的な農業の性格から考えても、内部からの変化は緩慢なものに過ぎないと考えられる。

秩父盆地東南部に於ける養蚕業の地理的考察

神田 昌子

1. 研究目的

本年度卒論の方針「地形と土地利用」は一応の基本線となっており、その他に新たなるテーマを出してもよいとのことで、我が郷土埼玉県の西部に位置する秩父盆地東南部の地形と土地利用を研究すると共に、この地域の土地利用の一大特色である桑園を発展させて、養蚕業の考察を試みた。従って次の二点を目的とした。1、養蚕中心にみた秩父東南部の地域性の把握。2、秩父養蚕業の現状、将来の把握。勿論両者は全く別のものでなく、2を知ることによって1の把握が出来るわけであり、主たる目的は1にあるわけである。およそ、地理学の目的は「地域性」の把握にあると我流なりに納得したためである。

2. フィールド

何よりも地理的に興味のあることが地域設定にあたってのオー義的条件となる。その他調査に便利であること、地域的まとまりのあることなどを考慮した上、本フィールドを選んだ。

本フィールドは秩父市を中心とし、荒川が中央を流れて見事な河岸段丘地形を呈している。又、日本地質学の故郷と呼ばれるごとく、秩父古生層の分布がみられ、歴史的にも様々な話題をもっている。産業に於いても古い歴史をもったものが多く、最も中心となるべきものが秩父養蚕であり、秩父地方の開発は絹の発展と共に進められたといっても過言ではない。現在、その絹も大分衰えてそれに代る合成繊維の拾頭が著しいが、農業に於いては依然として養蚕中心といった状態である。が盆地としてとざされたこの地域にも近代化、都市化の波が押しよせており、工業の示める地位は今々養蚕をしのいできており農業に与える影響も大なるものがある。

3. 地 形

秩父盆地が侵蝕盆地であるのか断層盆地であるのか明らかでないが、盆地内には荒川により形成された三段の河岸段丘が見られる。上位段丘はかなり

侵蝕を受け丘陵化しており、ロームが相当厚く堆積している。中位段丘にもロームの堆積がみられるが、二次的なものと考えられる。下位段丘は最も広い平坦面を見せて荒川兩岸に発達し、秩父住民の生活の場として重要である。

以上三段丘の他、山地、丘陵斜面、旧河道、荒川の川原、氾濫原、荒川支流の谷底に分類を行った。

分類にあたっては、地形図、空中写真を利用し、不明な点は現地におもむいた。地形などの程度に扱うかが疑問となったが、地形学と地理学のちがいを考えたとき、地理学では現在の地形をみればよいと判断し、勿論能力の点でも不可能なことであり、地形発達史は避けた。しかし細かい分類では、地形の形成課程を考える必要を生じ、それが出来ないため分類も実に概略的なものとなってしまった。

4. 土地利用

秩父は畑 91%、水田 9%の土地利用を示し、礫層で水が得にくいことその他の理由により水田化は遅れている。畑の内容をみると桑、麦、甘藷、豆といったところが主である。テーマにそつて桑園に主眼点をおいてみると、最盛期に比して相当減つていることは事実であり、それを具体的に知るため数量的、分布的に比較してみた。数量的には最盛期とみられる昭和 4 年と昭和 35 年、分布的には明治末期と現在の土地利用図で行つた。こうして桑園中心の土地利用の変遷を辿つてみると、桑園は減少しているが、秩父においては今なお重要な土地利用となっていることが判明した。そこで次に桑園に依存した秩父の農業の概観を 1960 センサス中心につかんでみた。土地利用をさらに展開させ農業の考察を行うことは必要であり、後の章では養蚕業にしばつてしまうため、こゝで農業全体を把握しておこうと考えたわけである。

5. 養蚕業

秩父郡の資料をもとに、養蚕農家数、収量量、桑園面積の変遷を辿ると、最盛期は昭和初期～5年頃となる。その後 20 年頃までは急カーブで下り坂となり、21 年以降はある一定線を保っている。最近の動向をみても除々に収量量が上つてきており、秩父においてはまだまだ養蚕が衰えていないことを物語っている。以上養蚕業の現在示める位置をつかんだ後、養蚕業の実際、技術改良の効果などにふれた。こうしてみると農業の近代化に伴ない、養蚕業にも共同化、技術改良などの問題点、あるいは他産業との競合などが浮かび上がり、同じ秩父でもかなりの地域差があると予想し、部落に入ってその問題点を具体的につかもうと思ひ、資料、聞き込みなどから養蚕依存の大小、他産業との関連に留意しつつ、下藤田、中郷、橋場の三部落を送んだ。

農協の資料、聞き込みを中心に調査してみると、中郷では都市化に伴う工場化、宅地化とソサイの増大、蕎麦場ではコンニャク栽培などが比重大となって大きく登場してきた。がこの二部落でも養蚕の今後を真剣に考えており、急激に養蚕は衰えずという結論となった。三部落に共通することは養蚕の近代化をすすめるための将来の方針が大切だという点であつた。そこで三部落のまとめとして共同化、有畜養蚕、技術改良などの問題を検討した。

6. 結 論

前述した2の目的は自分なりにつかんだつもりであるが、1の目的が果されなかつたのは遺憾である。地域性の把握ということ自体抽象的であり、大変むずかしい問であろう。養蚕の現状調査にあたり、他の養蚕地帯との比較を行なつたなら、1の目的もある程度達成したのではないかと後悔は尽きない。

以上秩父養蚕業を調査し、それが今だに秩父の農業の中心となつていること、農業の近代化に伴い養蚕の共同化が唱えられていること、そして古くからの養蚕地帯である秩父にも工場化、宅地化などの現象が所によってみられることなど、様々な興味ある問題が姿を現わしており、それにとまどいながらも、改めてサワーの云う *Cultural landscape* の重要性、複雑性を悟つたわけである。

◇

◇

◇

内容的にはごく簡単に省略し、私なりの方法論中心にまとめてみた。方法論についての知識も浅く、かなり独断的になつたと思うが、御批判いただければ幸いである。

秩父盆地西北部の地形と土地利用

佐久間 治子

この報告は、上記の調査地域を地形と土地利用の面から考察し、地域の性格を把握する事を目的とした。しかし結果は満足出来るものとならなかつたが、可能な限りその目的遂行に努力したつもりである。

1. 概 説

調査地域は、埼玉県秩父盆地の西北部で、秩父郡小鹿野町、吉田町に属する。この盆地は、関東山地の中にあり、縦横13km内外のほぼ方形を示す。地形は、全体に東北に向つて低下し、海拔高度は出口付近で160m、一番高い三峰口で320mである。この盆地を荒川本流と、赤平川、吉田川、横瀬川等の支流河川が、盆地出口で一つになつて、峡谷を流下し、平野に達して